

# JIC インフォメーション

第 231 号 2024 年 10 月 10 日  
年 4 回 1・4・7・10 月の 10 日発行  
1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 [jictokyo@jic-web.co.jp](mailto:jictokyo@jic-web.co.jp)

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NSビル 5 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



## ロシア・旧ソ連 国際交流誌



写真は、本紙記事より抜粋



《報告記》 ウラジオストク・ロシア語研修旅行  
心の海に灯台を……………岡田 陽奈……………2P  
《ロシアンサロン》 日ロ友好愛知の会  
ロシアに住んだ 10 年……………土屋 千登世……………4P  
《日ロ交流情報》  
シベリア抑留犠牲者追悼の集い、ほか……………7P

《連載》 こんな時代にロシア語のすすめ  
「子どもキャンプで『王様ごっこ』」……………黒田 龍之助……………9P  
《本の紹介》  
「板ばさみのロシア人」「脱露」「日ソ戦争」……………10P  
《講演録》 日ロクラブ講演会  
「第 5 次プーチン政権について」……………石郷岡 建……………14P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。  
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

JIC では、今夏ロシア・ウラジオストクの極東連邦大学でロシア語研修旅行を行いました。参加者は 7 名。8 月 12 日に羽田から北京経由でウラジオストクに飛び、8 月 27 日に全員無事帰国しました。滞在中は、平日毎日 45 分×4 コマ×10 日間＝計 40 コマのロシア語授業を受け、授業以外にも博物館見学やロシア料理作り、ロシア人学生たちとの交流会など多彩な文化プログラムを体験して、参加者の皆さんから「充実した研修旅行だった」との感想を多くいただきました。

以下は、参加者の一人、早稲田大学の岡田陽奈さんから寄稿していただいた体験記です。「ロシア語漬け」の 2 週間はとても刺激的で、楽しい毎日だった様子がよくわかります。

なお、JIC では来夏もウラジオストク極東連邦大学でのロシア語研修ツアーを計画しています（編集部）。

## 「ウラジオストク・ロシア語研修旅行」

# 心の海に灯台を

岡田 陽奈（早稲田大学 学生）



東方経済フォーラム(9月)の会場準備が進む極東連邦大学

### はじめてのロシア

右を見ても左を見ても 360 度ロシア語が飛び交い、空港の案内板にはキリル文字が踊る。送迎バスの車内ラジオからは、ヴィソツキーの歌声が聞こえてくる……。大学でロシア語を学び始めてから 4 年、ついに現地に降り立ったときの感動はひとしおだった。何よりも、ロシア語が使われている国が本当にあるという事実を目の当たりにして不思議な感覚に包まれた。旅行中は毎朝目覚めるたびに「今、私はロシアにいる！」と思い出しては、ひとり喜びを噛み締めていたほどだ。

ロシア文学を専攻し、ロシアの詩や小説に親しんできた私は、日本にいながらもロシアという国を身近に感じていた。しかし勉強を続けるにつれ、一度は「ロシア語漬け」の世界に実際に身を置いてみたいと思う気持ちが強くなっていった。そこで今回、ウラジオストクの極東連邦大学での 16 日間のロシア語研修に参加する巡り合わせとなった。

### 1 日のすごしかた

午前中の授業はすべて、研修参加者の 7 名のみで行われた。主に会話の授業が中心で、担当のナターリヤ先生は発音が難しい単語などもお手本を示しながら丁寧に指導してくださった。授業で扱う題材は衣食住などの身近な話題に始まり、ロシアの昔話や子ども向けアニメーションを用いたの読解・音読練習など多岐に渡った。また、ほとんどの授業内容が同じ日の午後に観光プログラムで出かける場所と連動していたため、実践的に学ぶことができた。たとえば、沿海州水族館へ行く日には水族館の歴史や海洋生物の名前を勉強し、サファリパークへ行く日には街のシンボルであるアムール・トラについて学ぶ。午前中の授業で得た知識をその日にすぐに使ってみることができる環境は、ロシア語をロシアで学ぶ醍醐味だった。



ウラジオストクのランドマーク、トカレフスキー灯台

午後には毎日のように街へ出かけていた。研修中は参加者 7 名で常に行動を共にし、仲を深めることができた。大学提供の観光プログラム以外にも自由時間にはそれぞれが行きたい場所を提案し合い、遊園地やマトリョーシカ専門店、ジョージア料理店などを探索して街を満喫した。私も渡航前からぜひ行ってみたいマリンスキー沿海州劇場をリクエストし、全員でオペラを観に行行った。観劇した全四幕のオペラ『アイダ』は、映像を用いた現代的な舞台装置も相まってとても見応えがあった。本場ロシアでオペラを観るといふかねてからの夢を叶えることができ、心に残る思い出となった。

### 文化をめぐって

研修中には、現地極東連邦大学の学生さんたちと交流をすることも楽しみの一つだった。それも単に同年代というだけでなく、日本の文化を学んでいる日本語学科の学生さんたちだ。実際に 4 年生の方が研修のサポーターとして常に同行してくれたほか、様々な学年の方がボランティアとして授業や観光に付き添ってくれた。いざ話をしてみると、彼らの日本語を話す力の高さには驚きばかりだった。皆、見事に日本語の独特な言い回しを使いこなしている。翻って、同じくら

いの期間ロシア語を勉強しているはずの私の会話力はどうか、.....と思わずにはいられなかったが、彼らの姿を見て大いに刺激を受けた。

会話の内容は様々だったが、「ロシア人では」「日本人では」など、お互いの国の文化の話では盛り上がった。特に印象深かったのは、日本人の「一人旅」が話題に上がったことだ。ロシアでは、旅行は友達か恋人、家族と行くものだけれど、日本人は敢えて一人でいることを選んで出かける。それはなぜか、という。改めて聞かれてみると説得力のある理由がなかなか出てこず、みんなで頭を捻って意見を出し合った。そこから話は、ロシアと日本の「友達」の定義の違いへと広がっていった。ロシア語には、日本語のように顔見知り程度の知人を含めた広い意味での「友達」を指す言葉がない。代わりに друг という単語が日本語での「親友」にあたる言葉として使われている。実際に学生さんたちに聞いてみても、друг と呼ぶような存在は1人か2人という意見が多かった。お互いの文化をめぐる話は尽きず、毎日誰かの持ち寄った話題で盛り上がった。街を散策しながら、バスを待ちながら、あるいはホテルで誰かの部屋に集まってお酒を飲みながら。観光や買い物もよいけれど、そんな風にあれこれと話をすることは何よりも楽しいのだった。

### 話しかけられる

「ロシアではよく人に話しかけられる」という噂は本当だった。それも、一度ではなく何度も。ある日、極東連邦大学の海を見に行った時の出来事だ。大学のキャンパスは海に続いており、構内を歩いて行くとビーチに出る。私はそこで波の音を聞くのが好きで、滞在中は何度も散歩に行っていた。その日もビーチに座り、日本から持参した文庫本を開いて読書に耽っていると、ふと背後に人の気配を感じた。振り返ると、サングラスをかけた四十代くらいの男性が私の本を覗き込んで一言。「読めないなあ、なんの本を読んでいるんだ？」日本語独特の縦書きが珍しく映ったのだろう。そのとき持っていたのは、ロシアの作家ゲルツェンの『過去と思索』の日本語訳だったので、原題の記してあるページを見せると納得したようだった。一目で気さくだとわかる男性はそのまま隣に腰掛け、私と会話を始めてくれた。「ウラジオストクには何をしに来たのか」、「どこに観光に行ったか」、「ロシア語はいつから勉強しているのか」と質問をしてくれる。お互いにひと通り自己紹介を終えると、ボリスさんというその男性は「ロシア語の勉強に来たのなら、話す練習をしよう！ なにかぼくに質問してみて」と、すすんで私の会話練習に付き合ってくれた。私が時々ロシア語が聞き取れず困っていると、「今言ったことは分かった？」と確認し、易しい表現に置き換えて話してくれる。突然始まったおしゃべりは、そんな風にして意外にも長く続き、別れ際には何度も振り返って手を振ってくれた。

思いがけないおしゃべりの思い出はほかにもある。ある時、買って来たパンを電子レンジで温めようと、ホテルの共用スペースに向かった。人ひとりがやっと入れるくらいの小さな部屋には先客がいたので、私は外で順番を待っていた。その男性はすぐに順番を譲ってくれたのだが、まだほかにも温める物があったのか、そのまま部屋にとどまっている。そして私がレンジの出来上がりを待つ間に話を始めてくれた。「お互いどんな食べ物を温めに来たか」という話題に始まり、なぜか男性がその前日に中華料理を食べた話になった。男性は「友達と昆虫食に挑戦したんだ」と嬉しそうに話しては写真も見せてくれた。電子レンジの出来上がりを待つ間の二分ほどの出来事だったけれど、私にはそんなわずかな時間でも話をしようと思ってもらえたことが予想外に嬉しかった。

さらにほかにも、朝食時と昼食時に利用したホテルの食堂では、「食堂のおばちゃん」たちと毎日顔を合わせるうちに、研修の参加者全員が仲良くなった。最終日にはおばちゃんたちを含めてみんなで記念写真を撮ったほどだ。ひとときだけれど温かい出会いの連続は、私にとって忘れられない出来事になった。人見知りで、普段は自分から知らない人に話しかけることなど決してできない私にはなおさら衝撃的だった。見ず知らずの私に話しかけてくれた一人ひとりを、ずっと覚えておきたいと思う。



(左) 食堂のおばさんと、(右) 野外研修の一コマ(写真提供:井口茉莉花さん)

### 思い出が灯る

ウラジオストクのランドマークであるトカレフスキー台について授業をした時のこと。先生があることわざを教えてくださいました。У каждого в море есть свой маяк! 直訳すると、「すべての海には灯台がある」という意味だが、転じて「人間一人ひとりにはそれぞれの居場所がある」という意味になるのだそうだ。私には、この言葉がどこか今回のウラジオストク研修を象徴するように思えてならなかった。灯台は、昼間は広い海にぽつんと立っただけの存在に思えるけれど、夜になると光を発して船に自分の位置を知らせる大事な役目を担っている。この旅で出会った先生や学生さんたち、そして一瞬の時を共有したおしゃべり好きの人たちとの思い出は、私の心の「居場所」の一つとなった。沢山の素敵な人たちとの出会いはまさに「光」であり、ことあるごとに思い返しては私を支えてくれるだろう。ウラジオストクに立つ灯台はあの場所から、今度は私の心の海も照らしてくれるに違いない。(おかだ・はるな)

9月12日、日ロ友好愛知の会の「ロシアンサロン」が名古屋市内の会議室で行われました。2013年からロシアのペルミ・バレエ学校に留学、卒業後はクラスノヤルスク・オペラバレエ劇場でバレリーナとして活躍し、22年に帰国した土屋千登世さんが「ロシアに住んだ10年」と題して、現地生活の思い出やロシア人気質をロシアの絵本や写真・ビデオなどを見せながら講演しました。

以下は、土屋さんのお話の要旨をまとめたものです。日ロ友好愛知の会の了解を得て掲載させていただきます(文責;編集部)。



## 日ロ友好愛知の会「ロシアンサロン」/24年9月12日

# ロシアに住んだ10年～絵本や料理から見たロシアの人々

講師; 土屋 千登世さん (バレリーナ)

ウクライナ侵攻で、ロシアのイメージはとて悪くなりました。私はロシアで10年過ごして、ロシアの人たちの温かく愛情に溢れた行動にいつも救われていたので、いま日本でロシアの国やロシア人のイメージが悪くなってしまっているのは本当に残念です。

ロシアには私が学んだバレエをはじめ、オペラ、クラシック音楽、絵画・美術など、さまざまな芸術が溢れています。ちょっと映画を見に行くような感覚で、家族やカップル、友達同士で劇場に足を運び、バレエやコンサート、演劇、ミュージカルなどを楽しむ人が多く、文化的にとて豊かな国です。そんなロシアの素顔を今日はロシアの絵本と料理を手掛かりに紹介したいと思います。

### 力を合わせることの大切さ「大きなカブ」

「大きなカブ」というロシアの童話は、日本でもよく知られています。おじさんが植えたカブが大きく育って、おじさんが抜こうとしても抜けません。おばあさん、孫娘、犬や猫、ネズミまで手伝って、みんなが力を合わせてやっとカブは抜けました。一人の力ではできないことも、たくさんの人が協力したら達成できるというお話です。

まさに私がロシアに住んで感じたことは、ロシア人の結束力や団結力、協力し合う心の強さです。バレエの舞台も一人だけの力では何ともならない。監督さんやダンサーはもちろん、照明や衣装、装置の技術者、小道具担当やヘアリスト、本当にいろいろな人たちの協力が必要です。

ロシアは民族舞踊も有名ですが、大勢の女性が連なって、まるで機械仕掛けの人形のように、流れるように動いていく踊りがあります(ビデオ上映)。長いスカートの下で、つま先だけでこまかく動くことによって移動するのですが、やはり

これは全員の息が合っていないとできないですし、こういう集団的な力はまさにロシアならではの力だと思います。



華麗なロシアの民族舞踊～息が合った動きが特徴

### 損得抜き助け合い「ハリネズミと金貨」

「ハリネズミと金貨」という絵本を紹介します。ハリネズミのおじさんが道端で金貨を拾いました。ハリネズミのおじさんは冬ごもりの準備に金貨で干しキノコを買おうとしましたが、どこにも売っていません。その時、リスが「私がタダであげるよ」「その金貨は靴を買い替えるのに使って」と言って、キノコを分けてくれました。カラスのもとへ靴を買いに行くと、カラスが「靴ぐらい作ってあげるよ」「その金貨は暖かい靴下にも使って」とタダで靴を作ってくれました。靴下を買いに行くと、クモが「お金はいらないよ」と暖かい靴下をくれました。最後に、蜂蜜をさがしていると、いつもお話を聞かせている子熊がお礼にと蜂蜜を持ってきてくれました。小熊を見送ったおじさんは、「この金貨がまた誰かの役に立つかもしれない」と、金貨をもとあったところに置いて冬ごもりをしました。すごく心温まるお話です。ハリネズミのおじさんをみんなが見返りを求めず助けてあげました。



もちろん、ロシア人にもさまざまな人がいて、みんながみんな良い人ばかりではありません。でも、私はロシア生活の中で、仲間や友達に損得抜きにどれだけ助けてもらったか、それは数え切れません。私が夏の休暇で日本に一時帰国をしてロシアにもどった時、アパートの鍵が開かないことがありました。大家さんに電話しても早朝で電話に出てくれなくて、友だちにメールを入れたらすぐ返信があってタクシーでアパートまで駆けつけてくれました。その時の安心感といたら今でも忘れられません。風邪で寝込んだ時には栄養をつけるために手作りの料理を運んでくれたり、ケガをした時は病院に付き添ってくれて家まで送ってくれたり、本当に助けられました。友達はみんな見返りなど求めません。困っているから助ける。それが自然にできるんですね。それは、おそらく 20 世紀の大半をロシア人は市場の働きが弱くて、必要な時に必要なものが得られない社会を生きてきたからだと思います。その時代、お金はあってもあまり役には立たず、知人友人の間で必要な物や情報を融通し合うことが多々ありました。

「100 ルーブルより 100 人の友を持って」という諺があるぐらい、ロシア人は人とのつながりを大切にしてきたのです。

「ハリネズミと金貨」のお話でも、森の仲間をつないでいる思いやりが描かれます。お金は本来人と人が力を合わせて生きることを助けるものですが、現実には経済の発達した国ほどお金儲けだけが目的となって、お金を通して結びついていく人々の姿が見えなくなっています。この作品は私たちに社会というものの原点、人と人とが寄り添って生きていることの意味を教えてくれる作品だと思います。

### 貪欲を戒める「金のさかな」

ロシアの有名な作家プーシキンが書いた童話「金のさかな」では、逆に、人間の欲望や傲慢さがユーモラスに描かれています。

おじいさんが海でキラキラ光る金のさかなを釣り上げました。金のさかなは「私を海へ帰してください。その代わり何でもお望みをかなえます」と言います。おじいさんは「お礼はいらない。青い海で思い切り泳ぐがよい」とさかなを海へ帰しました。家に帰っておばあさんに話すと、「何でお礼をもらわなかったの！せめて洗濯桶でももらってほしいの」と怒鳴りつけ蹴飛ばしました。おじいさんは海にもどって金のさかなを呼び出し、おばあさんの望みを言いました。おじいさんが家に帰ると、新しい桶がありました。しかし、おばあさんの要求はエスカレートしていきます。「今度は、家

を建ててほしい」。家が建つと「貴族になりたい」。次は「女王になりたい」。最後に、「海の女王になりたい」というおばあさんの欲望をおじいさんが伝えると、海は暗く大荒れになり、金のさかなは何も言わず深い海の底へ消えていきました。おじいさんが家に帰ると、そこにはもとあった古い小屋と壊れた洗濯桶がありました。こういうお話です。

欲深く、傲慢な人は自分のことばかり考えて、人のことを思う気持ちはありません。ロシアでは、プーシキンの「金のさかな」の最後の場面からの引用で、「壊れた桶のそばにいる」という言い回しがあります。その意味は「もとの木阿弥」ということです。

紹介した 3 つの絵本は、力を合わせて協力することの大切さ、損得計算抜きの人助けをする思いやり、最後に貪欲になってはいけないよという教え、まさにロシア人が生活の中で大切にしている心が分かりやすく描かれています。

### 自然と触れ合うダーチャ生活

ロシアの童話はすごく芸術性が高く、質の高い絵が描かれています。動物や自然が主役になっているものが多いです。それはロシア人が自然を愛し、とても身近で大切に思っているからです。

ロシア人の生活で私が興味を持ったのは、ダーチャと呼ばれる別荘での暮らしです。自然豊かな郊外にダーチャは建てられています。そんなに立派な建物ではなくて、小さな小屋のような家が多いです。小屋の周りには花や野菜が植えられて、ロシア人は夏の時期にトマトやキュウリなどたくさんの野菜をダーチャで収穫します。

もともとダーチャは、サンクトペテルブルグの町の周りを開発するためにピョートル大帝が家来の貴族たちに与えた田舎の屋敷のことです。その頃は数百ヘクタールもある広い土地に建つ豪華な建物がダーチャでしたが、19 世紀初めごろから「郊外の一時的な住居」という意味になり、ペテルブルグやモスクワが大都会になっていくにつれ、19 世紀末からは平民も小さいダーチャが借りられるようになりました。ソ連時代のダーチャは何より家庭菜園の場所になり、じゃが芋、キュウリ、イチゴなどを作って、週末や夏休みをダーチャで過ごす人が増えていきました。21 世紀初めの統計ではロシア人口の 40% がダーチャを持っているということです。

ダーチャでは、野菜や果物作りのほかに、近くの川で泳いだり、読書や家族で会話を楽しんだり、ロシア人はのんびりと過ごしています。週末はダーチャで心身ともにリフレッシュして、日曜の夕方都心にもどり、再び仕事を頑張ろうという生活が習慣になっている人もいます。

### 手作り野菜で作るロシア料理

ダーチャで自然栽培した野菜は、もちろんサラダやスープなどの材料に使われるのですが、長い冬を過ごすロシアでは夏に野菜をいっぱい作って塩や酢に漬けて瓶に詰め長期保存

をします。大きな瓶に自分で作ったトマトやキュウリを入れて酢や塩で漬物にしたのが「ピクルス」ですね。スーパーでも売っていますが、やっぱり手作りのピクルスが美味しいです。キャベツを酢、塩、砂糖で瓶詰にして作った漬物、これを使って作るちょっと酸っぱいスープがロシア語で「シー」というスープです。

イチゴとかベリーなどは甘く煮てジャムにして保存します。ラズベリーやブルーベリー、カシス、ブラックベリーなど、野生のベリーを砂糖で煮詰めて作ったものが「ヴァレーニエ」です。普通のジャムよりも少し水分が多くサラッとしています。コクがあつてすごく美味しいです。ヴァレーニエを氷水で割って作るジュースがあります。「コンポート」とか「モルス」と言います。ロシアのカフェやレストランには必ずあるドリンクです。

「クヴァス」という飲み物もあります。ライ麦から作られた発泡性飲料水です。ライ麦を煮立てて、レモンや砂糖や蜂蜜などを加えて作るのですが、少し甘いビールのような何とも表現しがたい独特の味で、最初に飲んだ時は衝撃的でした。長い間苦手だったのですが、ある時とっても美味しいと感じることがあり、飲み慣れてくると美味しいと思うようになりました。実はサウナの後に飲んだクヴァスが美味しかったんですね (笑)。

### バーニャ (サウナ) が大好きなロシア人

話が少しそれますが、ロシア人はサウナが大好きです。ロシア式のサウナのことをバーニャと言います。日本では高温・低湿度の乾燥サウナが一般的ですが、ロシアのバーニャは中温で高湿度の蒸気サウナです。木の建物の中でストーブを燃やし、石を真っ赤に焼いて水をかけます。バーニャの中では、白樺の枝を束ねたもの (レーニク) で体をパタパタと叩いて、軽くマッサージをします。叩くと血行が良くなり、発汗作用が促されるので、健康に良いとされています。さらにレーニクについた蒸気とともに香りが広がり、リラックス効果があります。私も何度もバーニャを体験しました。初めてレーニクで叩かれたときは「何するの?!」とびっくりしたのですが、「身体にいいからね」「風邪ひかなくなるからね」と言われてやってもらいました。怪我をしたところや筋肉痛もレーニクのマッサージが効くと言われていて、私たちは身体を使う職業なので、友だちとよくマッサージし合いました。不思議なことにすごく身体が軽くなって痛みが和らぐのです。

バーニャは、ロシア人にとって大切な社交場でもあります。銭湯のように公共のバーニャがあつて、知らない人同士が入るバーニャもあるのですが、数人で貸切るバーニャもあります。親しい友人や仕事仲間とバーニャに行つて、和気あゐいと過ごす時間をロシア人たちは大切にします。政治家もバーニャで重要な会議をすることがあるようです (笑)。

で、バーニャから出たあとに飲んだクヴァスがとっても美

味しかったのです。風呂上がりのビール 1 杯、あれと同じような感覚ですね。そこからクヴァスが好きになりました。



### ロシア料理あれこれ (写真は、ピロシキとボルシチ)

クヴァスで作る冷たいスープを「アクローシカ」と言います。これは日本でいえば、かき氷や冷やしソーメンといった夏の風物詩の一つです。クヴァスの中にハムとかキュウリ、ラディッシュ、ピクルスなどの具材を細かく切つて入れた冷たいスープです。私はこれが大好きだったので、今とても恋しいです。

ロシア人は料理上手です。ロシア人のおもてなしの特徴は、「思い切りがよい」です。暖炉に鍋をおいて調理することもあるロシアですが、「暖炉にあるものは全部出せ」という諺があります。あるものすべてを提供するというのがロシア式接客精神です。とくにソ連時代にはレストランで外食することはめつたになく、友人と楽しく時を過ごす場合は自宅か友人の家だったそうです。人を招くとなると、少し高くても質の良い食料品をそろえ、自作の瓶詰漬物なども使つて、腕をにかけて料理を作ります。そして友人たちとの時間を楽しまます。私も友だちの家に行くといつもテーブル一杯の料理でおもてなしをしてもらいました。

### <ピロシキ> 具材はいろいろ

日本でロシア料理と言えば真っ先に名前が出るのがピロシキかボルシチです。日本で売られているピロシキはひき肉入りの揚げパンが多いですが、ロシアでは揚げたものだけでなく焼いたピロシキがたくさんあります。具材もひき肉、マッシュポテト、魚肉、炒めたキャベツ、ゆで卵とネギが入ったものなど、様々な種類があります。甘いピロシキもあつて、ジャム入りや甘いカッターチーズ入りもあります。私がロシアにいた時は 1 個 30 円か 40 円くらい。手軽に買えて、よくつまんでいました。

### <黒パン> ずっしり重くて、ちょっと酸っぱい

ロシアの主食の一つはパンですが、小麦粉で作られる白パンと、ライ麦から作られるロシア独特の黒パンとがあります。黒パンはずっしり重くて、ちょっと酸っぱい味がします。ロシアでは白パンより黒パンの方が好まれてきました。それは、原料となるライ麦が寒くてやせた土地が多いロシアの自然条件でも育つ植物だからです。そして、ライ麦パンの方が健康に良いと考えられてきました。実際、ライ麦は栄養価が高い

穀物ですし、昔からロシアでは酸っぱいものは身体によいと信じられてきたので、黒パンの独特な酸味がロシア人に好まれたのではないかとされています。

クヴァスもちよっと酸っぱいですし、キャベツの漬物とか、酸っぱい食べ物が多いですね。ロシアの主食はパンだけではなくて、じゃが芋やマカロニ、ソバの実、もち麦=オートミールなどもあります。ロシアでは私もソバの実が大好きで、日本のふりかけとともに相性がいいので、日本からふりかけを持って行って、そばの実を食べていました。

#### <カーシャ> 甘いおかゆ

「カーシャ」というおかゆもあります。オートミールやソバの実、時にはお米でも作るのですが、砂糖やバターを入れて食べる甘いおかゆです。ロシアに渡ったばかりの時に、バレエ学校の食堂で朝ご飯にカーシャが出ました。「すごい、おかゆが出てる」と思って食べたら、とても甘かった。そのあまりのギャップに食べられなかったのですが、やっぱり慣れというのは恐ろしいもので(笑)、住んでいるうちに甘いカーシャが好きになって、そのうち自分で作って食べるようになりました。

#### <ブリヌイ> マースレニツァ (春祭り) の定番料理

もう一つ私が好きなロシア料理は「ブリヌイ」です。ブリヌイはロシア最古の料理の一つで、ロシア風クレープです。寒く厳しい冬のロシアで、人々が何よりも待ち望んでいるのが春の訪れで、ブリヌイは、「マースレニツァ」(春のお祭)の時に作られる料理です。これもピロシキ同様のいろんな具材を包んで食べます。サーモンやひき肉などを包むと食事の一品になりますが、ジャムや蜂蜜を包むと甘いお菓子にもなります。家庭ごとにブリヌイの味が少し違って、お母さんから代々受け継がれた味になっています。

ロシア料理は、私たち日本人にとっても口に合う、食べやすい料理だと私は思います。また、今のロシアでは日本料理も人気で、日本食レストランがたくさんあり、ロシア人たちも箸を使って食べるのが当たり前になっています。

\* \* \*

世界中のあらゆるところで戦争や内戦が多発しています。その背景には宗教、文化、民族の違いによる対立や、土地や資源の奪い合いなど、複雑な理由があります。今や世界の敵と見なされているようなロシアですが、童話から子供たちに伝えられているものは、助け合う心、思いやりの大切さ、食欲さの戒めなど、私たち日本人が大切だと思っていることと何も変わりありません。おそらく他のどの国を見ても人の心情というものは同じなのではないかなと私は思います。

私はロシアにいるときに、日本の良さも分かりましたし、ロシアの良い面もたくさん見てきました。ロシア人は日本人にはないものを持っていて、学ぶことがとても多かったです。素敵な面がたくさんあるロシア人を知っていただいて、少しでもイメージが変わったらとても嬉しいです。

## <日ロ交流情報>

### シベリア抑留犠牲者追悼の集い (8月23日) 今年も千鳥ヶ淵墓苑で厳粛に開催



8月23日、「第22回シベリア・モンゴル抑留犠牲者追悼の集い」が、東京の国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑で、各界の関係者を集めて開催されました。8月23日は「日本軍捕虜50万人を移送せよ」とのスターリンの秘密指令が発せられた日。戦後79年を経ても、シベリアに眠る死没者(6万人以上)の遺骨はまだ半分も収集されていません。シベリア抑留の実態解明と遺骨収集活動の強化が求められます。

また、この日の夜から8月26日まで4日間にわたって、故村山常雄氏がたった1人で10年がかりで作成し発表された死亡者名簿46300人をもとに、その名前を一人一人読み上げる追悼イベントが、今年も行われました。

### 日本ウラジオストク協会「懇談サロン」(9月7日) 極東連邦大学、オリガさんの話を聞く

極東連邦大学東洋学部で日本語を教えるオリガ・ホワンチュク准教授の来日を機に、9月7日午後、日本ウラジオストク協会の「懇談サロン」が、東京・浅草で開かれました。

サロンでは、「青年の町ウラジオストク」と題して、オリガさんがウラジオストクの町の最近の様子を、写真スライドを見せながら、話しました。



金角湾を見下ろす山の上にてきた新名所(オリガさん提供)

## ロシア語映画発掘上映会

### Morc 阿佐ヶ谷で L・ガイダイ監督特集

#### 6作品を一挙上映！

エース・スクエア（守屋愛さん）が主催するロシア語映画発掘上映会が、また一步マーケットを拡大しています。

「イワン・ワシリエヴィッチ転職する」など、昨年上映されたレオニード・ガイダイ監督の 6 作品が、Morc 阿佐ヶ谷で 9 月 14-16 日/21-23 日の三連休に一挙上映されました。しかも各作品の上映後は、沼野恭子さん（東京外国語大学名誉教授）、楯岡求美さん（東京大学教授）らロシア映画・ロシア文化に詳しい専門家のアフタートークが毎回あり、観客を楽しませました。

ロシア語映画発掘上映会の今後の予定は、エース・スクエアのホームページでご確認ください。

<https://sites.google.com/view/acesquare>



## 関西日ロ文化サロン (9月23日)

### 情熱と哀愁のロシア音楽の夕べ



9 月 23 日、大阪・梅田のカフェで、関西日ロ文化サロン（代表；岩佐毅氏）のミニ・コンサートが開かれました。

出演者は、ヴァイオリン（天野紀子）とアコーディオン（後藤ミホコ）のユニット TENGU。2 人だけのオーケストラとはいえ、その演奏は力強くかつ繊細。「黒い瞳」「ポーレシュカポーレ」「ともしび」「遠い道」などロシアンメドレーをはじめ、ジプシーメドレー（「チゴイネルワイゼン」「二つのギター」など）、さらにクラシック（チャイコフスキーの白鳥の湖ほか）と盛りだくさんのプログラムが、会場を埋めた観客をすっかり魅了しました。

## 日ロクラブが講演会 (9月21日)

### 第 5 次プーチン政権の行方を探る

9 月 21 日、東京・御茶ノ水の連合会館で、日ロクラブの定例会合があり、「第 5 次プーチン政権について」と題して、石郷岡建氏（毎日新聞元モスクワ支局長）が報告を行いました。プーチン政権の新人事では、軍事経験のない経済専門家ベラウソフ第一副首相が国防相に就任、ショイグ国防相が解任され安全保障会議事務局長に異動したことが話題になりましたが、「これはポストプーチンを見据えた布石ではないか」「プーチン体制の終焉と後継者選びが始まった」というのが石郷岡氏の見立てです。

講演録は、14 頁以下に掲載しています。第 5 次プーチン政権の構造と、新しい動きがよくわかります。

## 「縁」プロジェクト (9月25日)

### 在大阪ロシア総領事館で文化イベント



「日本・ロシア～文化を通して縁を結ぶ交流会」と題して、ロシアカルチャーセンター京都（代表；ビクトリア・トルストワさん）の文化イベントが、9 月 25 日、在大阪ロシア総領事館で開かれました。

関西在住のロシア人・日本人約 80 名が参集し、ロシア民族舞踊団「カチューシャ」のダンス、和太鼓の演奏や日本人とロシア人の踊り手による日本舞踊、着物ファッションショーなど盛り沢山の出し物を楽しみました。最後はロシア料理の軽食パーティで、参加者と出演アーティストたちとの交流が活発に行われました。

## 大阪大学で音楽ワークショップ (9月30日)

### 「ロシアにおけるロマとユダヤ」

9 月 30 日、ロシア文化とくに文学・音楽におけるロマとユダヤの影響を探る演奏会とワークショップが大阪大学でありました。主催はムーザ芸術研究会（代表；ヨコタ村上孝之准教授）。日本ではロシア民謡の代表とされている「黒い瞳」ももとはロマ（ジプシー）の音楽から来ており、ロシア・東欧ではロマ、ユダヤの文化と融合したスラブ文化が形成されてきたことが 3 人の研究者から話されました。

## こんな時代にロシア語のすすめ 第9回

# 「子どもキャンプで『王様ごっこ』」

黒田 龍之助

4 月よりロシア語の学習を始めて、半年が過ぎました。「恋人よ～、半年が過ぎ～」という歌詞にもあるように、6 か月はそれなりの時間です。

その半年間で、どのようなロシア語を習ってきたのでしょうか。わたしが教える大学では、もう一人の先生と組んで週 2 回の「ロシア語 I」がありますが、前期の修了段階では、たとえば次のようなことがいえます。

「これはナターシャです」「私はナターシャではありません」「これは私のスーツケースです」「あそこに古い写真があります」「雑誌を読んでいます」「日本語を話します」「彼女はどこに住んでいるのですか」「電話を持っていますか」「音楽を聴いているのですか」「小包を送りたい」……

こういうのを組み合わせれば、結構いろんな表現ができるものです。

もちろん、秋からはさらに勉強を続けなければなりません。過去や未来も表現したいし、与格や造格も身につけたいし、最後には仮定法だって使えるようになりたい。「もし私が鳥ならば～」って、別に鳥じゃないんだからそんな表現はいらない気もしますが、そういうことを表現できるのが、人間の言語の豊かなところ。

いろんな文法を知っていれば、表現に磨きをかけることができます。最初のうちは「これをくれ」とか「便所はどこだ」とか、身も蓋もないことしかいえませんが、語彙と文法が増えていけば、「これをいただきたいのですが」とか「手を洗いたいのですが」といった、優雅な言葉遣いが可能となるわけです。

ただしご注意を。かつて旧ソ連で「手を洗いたいのですが」という婉曲的な表現でトイレに行きたいと伝えたら、本当に手しか洗えない、洗面所に連れてかれて、困ったことがありました。ことばは相手と場所を選ぶものです。

日本語は遠回しで、外国語はストレート。あなたがそれを信じているとしたら、ここで考え直していただきたい。どんな言語でも婉曲表現があります。それにお気づきでないとしたら、相手があなたには無理だと判断し、ふつうだったら大人相手に使わないような、直接的な表現で話しているのです。それはあなたをバカにしているのではなく、理解できる範囲に調整しているのにすぎません。残念ながら、それがあなた



ピオネールキャンプでキャンプファイヤー。  
この中には残念ながら「陛下」はいない

の限界なのです。

秋からも勉強を続けて、あなたのロシア語を「野蛮な伝達手段」から「優雅な言葉遣い」に成長させてください。

言語はデリケートな表現ができることを目指して、日々磨きをかけるものだと考えるのですが、不思議なことに世間はその正反対を声高に主張します。

言語はツールである。

違いますね。そんなことをいつているから、たいした外国語が使えないのです。相手に不愉快な想いをさせながら、いいたいことがだいたい伝わっているからそれでいいじゃん自分を納得させるのは、どこか虚しくありませんか。何よりも相手の反応を見れば、評価されていないことは自ずと分かってしまうもの。

ことばにはいろんな伝え方があります。ふつうはなるべく一般的なものを選び、さらにはビジネス用の表現なんかを勉強する人が多いですが、そもそもビジネス外国語という分野は存在しません。ビジネスに限らず、語彙はどの分野でも独特なものがあるものの、それ以外は全人格を賭けて、真剣に話すしかないので。

ところがです。ちょっと面白い表現を覚えると、使ってみたくなるのが、私の困ったクセなんですよね。

子どもの頃から物語を山ほど読んで育ちました。実話や偉人伝が苦手で、空想的でナンセンスなものが好きでした。お伽話も大好きで、遠い国のお姫様や騎士の話も面白がって読んでいました。

こういう読書傾向は、外国語を学ぶときも変わりません。ソビエト時代から始まったわたしの外国語学習は、当時の世相とは程遠い、ファンタスティックなものに首を突っ込んでいました。

たとえばサムイル・マルシャークの『森は生きている』。翻案物ではペロー童話の『長靴をはいた猫』。ロシア語の授業では決して取り上げられることのない、でもロシア人だったら子どもの頃から親しんでいるに違いない、豊かなお伽話の数々が、わたしにはとても魅力的でした。

大学 4 年生の夏、ナホトカのピオネールキャンプ場で、通訳として過ごしました。もちろん JIC のお仕事です。ふだん

はキャンプ場の指導者に同行して通訳をしていましたが、子ども相手に遊ぶことも仕事のうちでした。極東大学日本語学科2年生のサーシャくんと組んで働いたのですが、子ども相手のときは彼がサッカー担当で、わたしが水泳担当。ロシア人の子どもに、海で泳ぎを教えたこともありました。

ピオネールは小学校3年生から中学校3年生くらいの子どもが対象ですが、キャンプ場にはもっと小さな子もいました。オクチャブリヤータという年少さんなんですけど、とくにグループを形成しているようには見えません。おそらくお兄さんかお姉さんがいるからいっしょにキャンプ場へ送り込まれたのでしょう。

そんな一人と仲良くなりました。

おそらく小学校に上がるかどうかといった年齢だったのでしょう。金髪の巻き毛でかわいい男の子だったのですが、同年の子がいないせいか、いつもつまらなそうにキャンプ場内を、後ろ手に組んで歩いていました。

そこで声をかけてみることにしました。でも、ふつうにあいさつするのは面白くない。いきなり彼の前で膝まづき、右手を胸に当て、左手は後ろに伸ばして、こういいます。

「陛下、なんなりとご命令を」

その子がいつも後ろ手に組んで歩いている姿が、わたしには小さな王様に見えたので、こんなふうに声をかけてみたのです。お伽話を読んで覚えたのですが、使う場面がなくて(そりゃそうです)、それでもいっぺん使ってみたかったのです。もちろん、男の子は大喜びして答えます。

では、そこら辺を走って参れ。

わたしは周囲を一周して、再び彼の元に戻ると、次の命令を待ちます。こんなことをして、遊んでみたのです。

やあ、元気。何しているの。これからどっか行こうか。

こういう口語表現はどれも実用的です。でも、ときには違った文体も使ってみよう。

陛下、ご機嫌麗しゅう。

物語ばかり追い求めていたおかげで、ヘンな語彙が身につきました。それもときには面白い。といいますか、現状に合った表現だけで満足してしまうと、外国語は語彙も文法も伸びないのです。ときにはこんなふうに、非現実的な表現を使ってみるのも、実はなかなか楽しいものでした。

あるときロシア人学生研修で、引率していた30代ぐらいの女性に、わたしはバスの中であいさつしました。

奥さま、あなた様のお隣に座る名誉をわたしにお授けくださいませでしょうか。

学生たちは大爆笑していましたが、引率の女性は平然と隣に座る許可を与えてから、こういいました。

「あなたは紳士の表現を知っている。あの学生たちはまだまだね」

わかりますか、複雑な文法はこういう為にあるのです。

## 本の紹介

### 「板ばさみのロシア人～プーチン時代に生きる狡知と悲劇」



ジョシュア・ヤッフア著  
長崎泰裕訳  
白水社  
定価 4600 円+税

著者は、米誌「ニューヨーカー」モスクワ特派員としてロシアを取材するアメリカ人ジャーナリスト。プーチン時

代のロシアに生きる人々の成功と失敗、葛藤や妥協とともにそのしたたかな生きざまを描く。

第1章から第7章まで、プーチン体制(=権威主義体制)の下で、チャンスを得て成功を収めた体制派から、その抑圧に抗いつつ協力した人、成功を収めながら一転「犯罪者」とされた人、一貫して良心に従って抵抗を続けた反対派まで、さまざまな立場の人々に取材しており、各章それぞれが一つの物語となっている。

[本書の主な登場人物]として本書裏表紙に記載されている人たちを紹介しておく。

コンスタンチン・エルンスト 「プーチン政治の映像プロデューサー」とも言うべき、国営テレビ局の最高責任者。

ヘーダ・サラトワ チェチェン戦争の悲惨な現実を目の当たりにして人権活動家として目覚める。

パーベル・アデルゲイム ロシアで尊敬を集めた聖職者で、教会を厳しく批判したことで知られる神父。

オレグ・ズプコフ クリミアで親ロシア派として住民投票し、夢と併合後の現実の間で悩む実業家。

セルゲイ・コワリョフ ソヴィエト強制収容所での流刑を経て、人権団体「メモリアル」の創設に参加。

エリザベータ・グリーンカ プーチンから評価され、政権と歩調を合わせて慈善活動を行うが、航空機事故で死亡。

キリル・セレブレニニコフ 国家資金横領で自宅軟禁処分を受けた、ロシア演劇界きっての演出家にして映画監督。

「プーチン世代」の普通の若者たち 開放的で野心もあるが、今ある安定を望み、「ポスト・プーチン時代」を予想させる群像。

著者の分析の視点は序章に示されている。独立世論調査機関「レバダ・センター」の創始者である社会学者ユーリー・レバダが「ソ連人」(ホモ・ソヴィエティクス)を分析するた

めに生み出した概念「ずる賢い人間」である。

「ロシアのずる賢い人間は『ごまかしを大目に見るだけでなく、騙されることを望み、自分を守るためなら自分を騙すことさえ必要だと思う人間である』。...『ずる賢い人間は、社会の現実に適応し、統治機構の中の見落としや欠落部分を探し、自分自身の利益のために「ゲームのルール」を使おうとしている。同時に見逃さないのは、この人間はいつもこの同じルールをずる賢い方法で回避しようとしていることだ』。

しかし、ソ連邦の崩壊は新しいタイプの人間の登場を告げるものにはならなかった。ソ連崩壊後のロシア市民は、ソ連邦時代の人々に似た態度をとった。」

著者ヤツファによれば、この「ずる賢い人間」は、ロシアの歴史に深く根差したものであり、強権的なプーチン体制と表裏一体のものでもある。

「次から次へと続いた失望と困難の90年代の後、ロシア国民の大部分は、国家の基本的な力と生活の安定を取り戻すと約束する指導者や組織が生まれることを歓迎した。.....(70%~80%というプーチン支持率の) その高い数字はまた、葬り去られた歴史に対する怒りを表すものでもあった。プーチンは国家の支配者というよりは、むしろロシアの集団的な潜在意識の表れなのだ。.....『他人への依存や嫉妬心があり、抑圧され攻撃的な人間の性格は—ある意味でずる賢い。』」(以上、序章より)

本書は、ロシアのウクライナ侵攻前に書かれて出版されたものであるが、プーチン政権下のロシア社会を理解し、いずれやってくるプーチン後のロシアを展望する上で、示唆に富んだ内容となっている。(F)

抑留」の具体的な実態についてはほとんど知らなかった。

「本書に登場するのは終戦後、ソ連領となった南樺太で民間人として生活していた日本人である。彼らの職業は、鉄道員、炭鉱夫、大工、運転手.....と、さまざま。普通の暮らしを送るなか、1946年から48年、『ある行為や事故』によってソ連軍により突然逮捕され、一方的な裁判を受けて囚人としてシベリアのラーゲリに連行される。ラーゲリに送り込まれた彼らは過酷な労働を強いられた末、刑期が明けてもどこかに強制移住させられ、ソ連本土に残留させられた。その後もさまざまな理由で帰還できぬまま、数十年に及びほとんど生死不明の状態が続いた末、ソ連邦崩壊によって歴史のクレバスから「発見」されることになった人たちである。」(本書、序章より)

この民間人抑留者たちのうち10名を取り出し、その“発見”されたいきさつ、抑留の経緯、ラーゲリ(収容所)とその後のソ連での苦難に満ちた生活、日本の家族との再会などを、第1章から第8章まで「もうひとつの抑留史」として描き出したのが本書である。各章それぞれが独立した人間ドラマとなっており、不条理劇の連続とも言うべきその内容は、どの章も読み出したら最後までやめることができない。

序章では、3000名とも4000名とも言われるシベリア民間人抑留者を生んだ戦後樺太の特異な状況と、その後、民間人抑留者が負わされた苦難の背景が述べられる。この序章が、シベリア民間人抑留者の問題を考える上での基本的な解説となっているので、要約して紹介しておきたい。

1904年の日露戦争の後日本領となった南樺太には、多くの日本人が移り住み、また炭鉱労働などに徴用された朝鮮人などを含めて、1941年時点で約40万人が暮らしていたが、戦後ソ連軍の占領下に置かれ、1946年2月に「南サハリ州」としてソ連領に編入された。ソ連軍侵攻直後の緊急疎開やその後の小型船による密航で約2万5000人が北海道へ脱出したが、1946年12月から49年7月まで5次にわたる集団引き揚げが終わるまで、多くの在留日本人がソ連人管理下の漁場や工場、炭鉱などで働き、またソ連本土から移住してきたロシア人との共同生活を強いられた。この間、軍役の解除とともに民間人にもどって暮らしていた元軍人が摘発されたり、職場で事故や過失で罪に問われた人、密航途中に監視船に捕まった人たちが(密航者の中には樺太にいる親族を探すために北海道から逆密航して捕まった人もいる)、「囚人」としてソ連本土の収容所に送られ、その後の集団引き揚げの網の目から洩れて「シベリア民間人抑留者」となった。

軍人捕虜たちの抑留者と民間人抑留者の違いは、軍人捕虜は所属部隊ごとにまとめて収容所に入れられ名簿も比較的整っているのに対して、どの組織にも属さない民間人抑留者は一人一人が個別に扱われ、ロシア人、ウクライナ人、ドイツ人、チェチェン人、朝鮮人などの囚人が混然とする中に放

## 「脱露〜シベリア民間人抑留、凍土からの帰還」



石村博子著

角川書店

2475円(税込)

日本の戦後処理の最大の問題の一つは、第二次大戦末期の「日ソ戦争」で満州・朝鮮半島・南樺太・千島でソ連軍と戦った日本軍将兵のうち約

60万人が戦時捕虜として抑留され、うち1割にあたる約6万人が異郷で死亡した「シベリア抑留」だが、軍隊に所属した軍人・軍属以外にも少数ながら民間人や女性が抑留された例があることは聞いていた。しかし、その「シベリア民間人

り込まれたことである。収容所内では、軍人捕虜と同様に森林伐採、土木工事、建築作業など過酷な労働を強いられた。だが、刑期満了で収容所を出ても、それで日本に帰れるわけではなかった。出所時には、行き先を書いた書類とわずかな食糧、金銭が渡される。行き先はシベリア、中央アジアなど、それまで聞いたこともない土地だった。ロシア語を満足に話せない彼らは、要所要所で書類を見せながら、汽車や馬車を乗り継いで、あるいは歩いて、指定された土地へたどり着かなければならなかった。彼らの持つ身分証明書はヴォルチー・パスポート（狼のパスポート）と呼ばれるもので、定期的に指定された警察署に出頭しなければならず、居住地の外に出ることは許されなかった（狼は一定範囲を縄張りとしてそこから出ることはないので「狼のパスポート」の名前がついたという）。移動の自由を奪われた彼らは、誰も知る人のいない町や村で何とか仕事にありつき、その日その日を生き抜いていくしかなかった。ソ連という国そのものが彼らにとっては巨大な監獄だったのである。

民間人抑留者の集団帰国が実現したのは、日ソ両国赤十字社代表による「邦人送還に関する共同コミュニケ」が1953年11月に調印されてからであり、同年12月から56年12月まで9次にわたってソ連地区後期集団引揚げが行なわれた。しかし、この時、さまざまな事情で帰国できずにソ連に残留した人たちがいた。その多くは、現地の女性と暮らして家族をもうけていた人であったが、中には集団帰国の情報を知らされず、帰国事業から除外された人もいた。残留した人の中には無国籍を貫いた人もいたが、多くはその後ソ連国籍を取得した。無国籍のままでは、移動や仕事、結婚など、生活上さまざまな制限や不利益を受けなければならない。生活の安定と市民としての権利を得るためにはそうする外なかったのである。

本書で紹介される「シベリア民間人抑留者」たちは、帰国と残留のはざままで悩みつつ残留の道を選び、望郷の念を募らせながら異郷で生き抜いた人たちである。

戦後、日本側では1953年に「未帰還者留守家族等援護法」が制定され、1954年から厚生省（当時）に設置された「未帰還調査部」が、各都道府県とともに帰還者から聞き取りを行い、ソ連に対して名簿を送って調査を要請するなどの作業を行った。日ソ国交正常化後の1957年の樺太を含むソ連地域の未帰還者は8029人と国内調査で数えたが、うち98%の7857人は状況不明者であった。これらを踏まえて、1959年には「未帰還者に関する特別措置法」が施行された。この措置法は調査究明してもなお消息が明らかでない者について特別の措置を講ずることを目的としたもので、いわば生死不明の未帰還者を「戦時死亡宣告」によって整理するものだった。この措置によって、未亡人に対する遺族年金の支給や遺産相続問題への対応、未亡人の再婚などを容易にすることが目的

だった。

「戦時死亡宣告」は未帰還者を死者とする整理であるが、これと動きを同じくして生まれたのが「自己意思残留者」と呼ばれる人たちである。

著者は言う。「本来、未帰還者が自発的意思に基づいて残留しているかどうかの認定は、とくに慎重を要するものではなく、真に自発的意思に基づくことが確認される場合に限り行われるべきものであろう。しかし、国はそのための努力をどこかで放棄し、帰還者の証言という不確かなものをよりどころに自己意思残留者の枠を膨らませていったのである。ちなみに自己意思残留者の認定は、サハリン残留邦人、中国残留婦人にも適用され、数としてはこちらのほうが圧倒的に多い。政府は『国際結婚した人で帰る希望を持っている人は非常に少数』との一方的な見解を打ち出し、それを定説にしていった。自己意思残留者となれば未帰還者留守家族手当の支給は停まり、調査も終結。国が関与する必要はない存在となる。帰国の意思の有無の調査はこのように性急に、本人と情報を共有されないまま進められていった。知らぬうちに自己意思残留者と認定される仕組みは、残留者にとっては切り捨ての過酷さがあり、実際に切り捨てとして機能したと言わざるを得ない。」

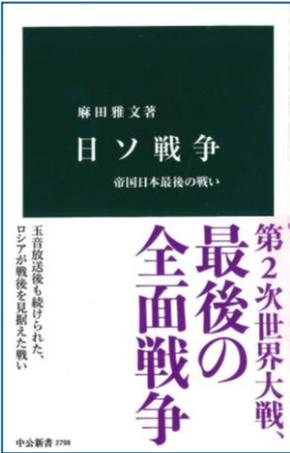
こうして数百名にのぼるシベリア民間人抑留者は「自己意思残留者」として歴史のクレバスに落とし込まれ、見えなくされ、忘れ去られていった。

ソ連崩壊前後からシベリア民間人抑留者を独自に調査し、一時帰国につなげていったのは「日本サハリン同胞交流協会」（2013年より日本サハリン協会）で、著者はその会員となってサハリン関係の取材をしている中で、民間人抑留者の存在を知る。自己意思残留者として国に切り捨てられた人々にも、「生き抜くために果敢に奮闘した歴史があったことを示さなければならない」という思いで、8年におよぶ調査と取材の上に本書を完成させた。

戦争によって狂わされた人生は決して元にはもどらない。人生で最も活力にあふれた時期に戦争と収容所生活、故なき「囚人」の烙印によって未来を奪われた人々の無念はどれほどのものであつただろう。しかし、それでも異郷の地で懸命に生き抜いた人々の軌跡を発掘し、残された日本の家族、現地の家族の姿も交差させながら描き出すことで、著者はどの人にも貴重なその人の人生があつたことを力強く示している。

戦争によって引き裂かれた人々の人生に新たな意味と生を吹き込む著者の試みは、多くの読者に読まれ記憶に残ることで完結する。是非、多くの人に手に取ってもらいたい一書である。(F)

# 「日ソ戦争～帝国日本最後の戦い」



麻田雅文著

中公新書

1078 円 (税込)

日ソ戦争は 1945 年 8 月 8 日から 9 月上旬まで、短期間ながら、満州・朝鮮半島・南樺太・千島列島で行われた第 2 次世界大戦最後の全面戦争であった。

両軍の参加兵力は 200 万人を超える。しかも、それは今日まで続く戦後の国際関係、とりわけ日本とロシア、また東アジアとの関係に大きな傷跡を残している。

「日ソ戦争は半月足らずの戦争だったが、残した爪痕は大きい。日本にとって敗戦を決定づける最後の一押しとなっただけではない。シベリア抑留・中国残留孤児・北方領土問題などはこの戦争を起点とする。広い意味では、朝鮮半島の分断や、満州で国共内戦が始まったのもこの戦争がきっかけだ。東アジアの戦後は、日ソ戦争抜きには語れない。」(本書「はじめに」より)

まことにその通り。しかし、日ソ戦争の本格的な研究はつい最近始まったばかり。著者によると研究の遅れの原因は、以下の 4 点に集約される。①冷戦下の歴史認識の食い違い＝日本を無条件降伏に追い込んだ要因を、アメリカは原爆投下を決定的だと言説を流布し、ソ連の参戦が日本の戦争指導者に与えた影響は低く評価されてきた。②日本の戦争研究の偏り＝戦争への反省から日本の侵略行為に焦点が当てられ、米英中ソ連合戦との「複合戦争」としての側面が見逃されてきた。③ロシア側の日ソ戦争研究もまたソ連時代から固定された「愛国的」な歴史認識によって制約されてきた。④なによりも自由に閲覧できる史料の乏しさが、戦史の具体的な研究を阻んできた。

本書は、満州や朝鮮半島、樺太・千島での戦争の諸相を詳しく取り上げているが、同時にこの日ソ戦争を当時の連合国(米英中ソ)の協力と対立、駆け引きのなかに位置付けて、ソ連の対日参戦がどのように準備され、参戦後の占領範囲が決められていったかを解明している。日本では「ソ連が日ソ中立条約を背信的に破り、一方的に満州に攻め込んだ」という言い方がよくされるが、何よりもソ連の対日参戦を強く望み、それを促したのはアメリカ・ローズベルト大統領だった。独ソ戦で 2000 万人以上の犠牲者を出し疲弊したソ連に対し、それでも対日参戦を求める「見返り」は 45 年 2 月のヤルタ

会談(米英ソ首脳会談)で取り決められた。ここに、今日まで続く「北方領土問題」の起源がある。

日ソ戦争は、日本政府がポツダム宣言を受諾し(8 月 14 日)、天皇が「終戦の詔書」のラジオ放送(8 月 15 日のいわゆる玉音放送)をしたあとも続いた。

なぜ 8 月 15 日以降も続いたのか。完全な停戦が実現するまでに時間がかかった原因は日ソ双方にある。著者は、新史料を駆使し、満州、朝鮮半島、樺太、千島と各戦線での具体的な戦闘の実態を描き出し、さらに占領範囲をめぐる米ソの駆け引きなども絡めながら、この戦争の全貌を描き出すことで、疑問への回答を与えている。

「あとがき」で著者はこう記す。「一歴史家にできるのは過去の戦争から学ぶべき点を提示し、風化に抗うことだ」。

戦後 79 年が過ぎ、戦場の悲惨を体験した当事者がいなくなり、さらに体験を聞いた世代もほとんどが老境に入ってしまった今日、戦争の記憶はますます薄れつつある。この時、ロシアでも日本でも、またその他の国でも、戦争の記憶を自分に都合のよい物語に変えて利用する傾向が強まっている。被害も加害も含めて、過去の戦争を直視することは苦痛だ。しかしその痛みと向き合い、教訓を引き出すことによるのみ、平和への道のりは確かなものとする事ができる。

まして、日ソ戦争の傷跡は、今もなお日ロ関係、日中関係、南北朝鮮と、東アジアの国際関係に暗い影を落としている。歴史に学ぶ意味はますます重要になっている。

最後に、本書であらためて教えられたことが少なくなかった。そのうちのいくつかを覚書メモとして書き置く。

【陸の特攻】日本軍は兵士に爆弾を抱えて戦車に体当たりさせた。張鼓峰事件(1938 年 8 月)で始まり、ノモンハン戦争、太平洋戦争へと引き継がれ、兵士に強要されていく。

【大陸命】天皇直属の関東軍総司令官に停戦を命じるには、陸軍参謀総長の命令だけでなく、天皇から陸軍そのものへの命令(大陸命)が必要だった。

【樺太・千島の戦略的価値】海上交通路の確保、日本爆撃の発信基地の確保のため、アメリカが先にその価値を見出した。南樺太および千島列島の占領はむしろアメリカがソ連に勧めた結果である。

【国民義勇戦闘隊】兵力不足を補うため兵役未満の若い男性や高齢者・女性も動員して 45 年 6 月から全国で作られた。南樺太では、この戦闘隊がソ連軍と交戦し、犠牲を生んだ。

【中国革命への無償援助】関東軍から没収した戦利品のうち、航空機・戦車・火砲などは、中国共産党にほとんどが引き渡された。ロシア側の研究によると、1945 年 9 月から 11 月までに、中国共産党に、砲と迫撃砲 3700～5212 門、戦車と装甲車 600～743 輛などが渡された。これらは中国共産党の軍力を飛躍的に向上させた。こうしてソ連側は、自らの懷を傷めず、中国共産党に恩を売ること成功した。(F)

9月21日、東京・御茶ノ水の連合会館で開かれた日ロクラブの定例会合で、石郷岡建氏（毎日新聞元モスクワ支局長）が「第5次プーチン政権について」と題して報告を行いました。3月の大統領選挙での勝利を受けて、5月に発表されたプーチン政権の新人事から見えてくるのは、「プーチン体制の終焉と後継者選びの始まり」「ポスト・プーチン体制準備の始まり」ではないかというのが石郷岡氏の見立てです。

以下、講演の主要部分と、当日の資料（抜粋）を同氏の了解を得て掲載します。（編集部）

## 講演録

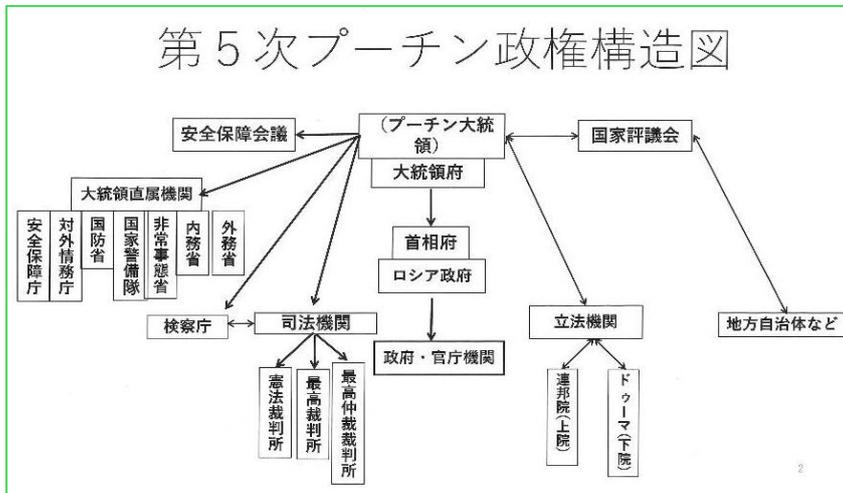
# 第5次プーチン政権について

## ～新人事異動に見る「プーチン後」の準備

石郷岡 建（毎日新聞元モスクワ支局長）

本年3月のロシア大統領選挙でプーチン大統領が87.28%の得票率で再選され、第5次プーチン政権が発足しました。5月7日に大統領就任式が行われ、新体制の人事が次々と発表されました。本日は、第5次プーチン政権について、「これから大きな変化があるかもしれない」という話をしたいと思います。

### I. ロシアの政権構造



### 三権分立が大統領が強い権力を持つ

まずは、ロシアの政治について、基本的なことを確認しておきます。図は、現在のプーチン政権の構造図です。ロシア憲法では、「立法」「行政執行」「司法」の三権分立制度ということになっていますが、現実には大統領が三権を超えた強い権力を維持しています。他の国でもそういう例は多くありますが、憲法上は三権分立と言いながら、必ずしも三権が分立しているわけではないということでもあります。

では、ロシア大統領は独裁的な権力を持っているかということ、そうとも言い切れない。ロシアでも大統領は全国民の選挙で選ばれる。任期は6年です。ここが中国と違うところで、国民が「これはまずい」と思った時には選挙で大統領を降ろ

すシステムが一応はあるということです。

左の図で三権分立というのは、真ん中に大統領・大統領府があって、その下に首相府・ロシア政府・官庁機関がある。これが行政権力です。その右にあるのは立法機関で、連邦院（上院）とドゥーマ（下院）があります。上院、下院というのは、実はロシア憲法にそう書かれているわけではないのですが、ドゥーマとか連邦院がでてきた時に、分かり難いので、私は特派員時代に下院、上院と書くようにしました。これが議会＝立法機関で、ここで法律が審議され決定される。左にあるのが司法機関＝裁判所で、憲法裁判所、最高裁判所、最高仲裁裁判所となります。

### 行政機関は首相府と大統領直属機関に分かれる

ところが、首相府・ロシア政府が管轄する行政機関とは別に、大統領直属機関の組織、官庁があり、これは通常の行政機関に入っていない。どういう組織が直属機関かということ、外務省、内務省（警察）、非常事態省、国家警備隊、国防省、安全保障庁、対外情報庁などです。いわゆる「シラビキ」と呼ばれる軍・警察・治安関係を中心とした組織ですね。これらは全部プーチン大統領の直轄

下にあって、首相は関係ない。つまり行政府は、大統領直属機関以外の、経済・産業・貿易・保健・教育・文化・科学技術など主に国内の社会経済政策を担当することになっているわけです。日本だと外務省や警察、防衛省なども行政府に全部入っていますが、ロシアはそうならないということです。

繰り返しますと、ロシアの三権の内容は、「立法」は上院と下院の二院制。「司法」は各種裁判所と司法組織です。「行政執行」は大統領府直接機関と首相直接機関に分かれます。「行政執行権力」が大統領直属機関と首相府・官庁機関と二つに分かれているため、ロシアの政治制度は「半大統領制」と呼ばれることもあります。しかし、現実には首相は大統領の指揮下にあるということになります。

ちなみに、政治権力と経済・社会統治力が分かれる制度は

ソ連時代に始まっています。プーチンの独裁だからということではないです。

## 「安全保障会議」と「国家評議会」

さらに、これらの政府機関以外に様々な会議・委員会が存在します。この中で最も大きな力を持っている権力組織が安全保障会議と国家評議会（国務院）です。

「安全保障会議」は、ロシアの国家・社会・個人に関する内外の重要問題および国家主権を守る課題での協議・諮問を行う大統領直接機関です。つまり、安全保障に関わる重要問題を協議し、大統領に諮問する。それを受けて大統領が決定を下す。こういう流れになっています。議長はプーチン大統領、副議長メドベージェフ元大統領、現在の事務局長はショイグ前国防相です。メンバーは軍事・外交・安保関係者が中心で、いわば大統領直属機関代表者たちの会議です。

「国家評議会」は、ロシア国家の社会経済の優先方向とロシア連邦の国内外の基礎的な政策を協議し諮問を行う大統領直接指揮機関とされています。国家評議会の議長もプーチン大統領で、副議長はいません。事務局長はデューミン前トゥーラ州知事です。メンバーは、ロシア連邦機関の代表、下院議長、下院の政党代表、地方自治体代表など、多くの人が入っています。

まだ、あまり指摘されていませんが、第5次プーチン政権において、これまで力を持っていた安全保障会議がだんだん力を失って、国家評議会の方へ権力が移りつつあるのではないかというのが私の考えです。

ロシアの政治権力機構の中では、これまで軍・治安関係者が集まる「安全保障会議」の方が重要で、有力組織だと見られていました。しかし、プーチン大統領は2020年、「国家評議会」を憲法に挿入し、安全保障会議と同等の地位に引き上げました。つまり、軍・治安問題優先から社会・経済問題優先へと舵を切り始めた。プーチン大統領の長期的目標が提示されたと言えると思います。このことは、後ほど述べるように、プーチンが次にその権力を誰に渡すかということと密接に関係してきます。

## 驚きを与えたショイグ国防相の解任

3月の大統領選挙の後、プーチンは5月7日に第5次大統領に就任し、新政権の人事を明らかにしました。ロシアの政府閣僚、および権力構造の顔ぶれに変化はなく、大きな動きはなかったとマスコミでは報道されました。しかし、人事異動を命じられた少数の関係者の動きをよく見ると、それは単なる職務の変更ではなかった。プーチン大統領の権力の終焉とロシア国家の方向転換の可能性を見通した国家戦略の変換期の第一歩が示されたように私には思えます。

大きな異動がなかった中で 人々に驚きを与えたのはショイグ国防相の解任でした。国防省は大統領直属機関で、国防省の下にロシア軍がある。軍のトップにいたのがショイグ国防相で、彼は解任されて安全保障会議の事務局長に移りました。ウクライナ戦争が続く中で、軍事行動・組織の指導者の解任は、戦争を続けられるかという疑問も生みました。左遷・更迭されたという声も飛んだ。

## 「ワグネル」の反乱騒ぎとの喧嘩両成敗？

ショイグ解任の背景には、昨年6月の民間武装企業「ワグネル」の反乱騒ぎがあったと思います。

ワグネルは国家の軍隊ではない。民間武装企業です。お金儲けの民間企業ですが、代表のプリゴージンは囚人を兵士として戦場に投入し、ウクライナ東部の戦況で非常に活躍をした。なぜかという、膨大な兵士の損耗を無視してひたすら前進させるような戦争の仕方をしたからで、私の考えではこれにロシア軍トップのショイグ国防相とゲラーシモフ参謀総長はいい顔をしなかった。「正規軍でもないワグネルが、何で手柄を立てたともてはやされ影響力を持っているんだ」と、プリゴージンとぶつかり合うわけです。この時プリゴージンは、ロシア軍がワグネルへの兵器弾薬供給を止めていると叫び、メディアを通して「俺たちに武器と弾薬を渡せ！」「ショイグとゲラーシモフは辞めろ！」と激しく攻撃した。国民の間にはワグネルに同情し、ロシア軍指導部を批判するような声が出るようになってきた。

これに対してプーチンは自分の考えをはっきり言っていないませんが、私は、プーチンは民間武装企業というものを全然評価していなかったと思います。根本的に、政府から離れた民間の軍隊はあり得ないというのが彼の考え方だったと思います。しかしながら、戦果を上げているので潰すわけにもいかない。結局プーチンは喧嘩両成敗をするわけです。

終わってみると、プリゴージンは反乱騒ぎを止め、「我々はただ大統領に対して、ロシア軍の不正を正してほしい」とお願いするために行進をしたんだと言うのですが、実際はプリゴージンの指揮下にあった兵士たちの中に、「仲間がどんどん死んでいるのに、兵器も弾薬も来ないのはおかしい」という、ある種の反乱に近い雰囲気があったということだと思います。反乱騒ぎの2か月後に、プリゴージンは飛行機爆発事故で死亡します。反乱の報いで殺されたという噂が飛びましたが、真相は不明です。

## 裏社会に通じた「ワグネル」プリゴージン

話が横道にそれますが、プリゴージンの背景には一筋縄ではいかない様々な組織やグループがあり、特に彼は裏の社会に強いわけです。囚人を兵士に募集した話ですが、凶悪犯を含む囚人たちがそんな簡単に兵士に行くわけではありません。なぜかという、ロシアの裏社会というのは、ものすごい力を持った社会で、第2次大戦前までは一切ソビエト政権の命令に従わないという、そういう組織でありました。親分・子分の関係が非常に強く、結束力が固く、政府とぶつかり合っていた。

第2次大戦が始まってドイツに攻め込まれたスターリンは、苦境を打開するために、ロシア正教とこの反社会組織に対して、戦争への協力を依頼するわけです。ロシア正教は、宗教弾圧の緩和と引き換えに、それを呑んだ。裏社会・囚人組織はどうなったかという、半分に分かれました。国のために協力しようというグループと、権力組織ましてや共産党政権には一切従わないというグループに割れた。

その後何が起こったかという、ソ連国内の刑務所の中で囚人同士のものすごい殺し合いが始まった。「スーカ戦争」と言われています。「スーカ」はロシア語で雌犬。いわゆる囚

人言葉の雌犬とは「どうしようもない奴ら」という意味で、「雌犬は全部殺せ」という話になって、ソ連全体でものすごい争いが起きたわけです。この話は外部にはほとんど伝わっていませんが、その時代のスーカ戦争を知っている親分連中は簡単には囚人を兵士に送ることはしないはずで

す。しかし、プリゴジンがこれをやった。彼と囚人組織・親分組織の間に何らかの関係がないとできない話です。この裏社会との関係は、プリゴジンが一介の乱暴者からレストラン・ビジネスで成功し、民間軍事会社を経営して、プーチン政権にも深く食い込み、どのようにしてこれほど強い力を持つようになったのかという話とつながるのですが、この話はここで留め置きます。

## ロシア社会のもう一つの側面

つけ加えておくと、ロシアの犯罪組織にはいろいろあって、例えばロシア人の犯罪組織とユダヤ人組織、チェチェン人組織、その他民族ごとに分かれていて、簡単には説明することができません。ということで、裏にはいろんなものがあるので、プーチンがプリゴジンを暗殺したと簡単には言えない状況があるわけです。

もう1つ言うと、ロシアではこの犯罪組織の義理人情みたいな世界、日本で言えば「網走番外地」のような、必ずしも悪者ではないけれど、義理人情に惹かれてそういう世界に入り、犯罪に手を染めてしまったというような話があり、こういう世界には隠れた人気がありました。

歌の関係でも、例えば日本で言うと歌謡曲ですが、この裏の世界の音楽というの、別にそういう犯罪組織だからということではないのですが、何故か心に響く歌が多くあります。実はプーチンもそれに共鳴していたというエピソードがあり、ソ連時代にプーチンはKGBの学校に入りますが、「プラトナヤムジカ」(犯罪者音楽)という犯罪組織で歌われる音楽を密かに集めて、学校の中に隠していたことが発覚し、放校処分寸前までいったとされています。

ということで、ロシア社会には、この裏の世界＝義理人情と強烈な仲間意識、ときにはそれが根強い反権力意識に結びつくわけですが、そういう社会がロシアにはあるということを知っておく必要があると思います。

## 軍事経験のないエコノミスト、ベラウソフ新国防相

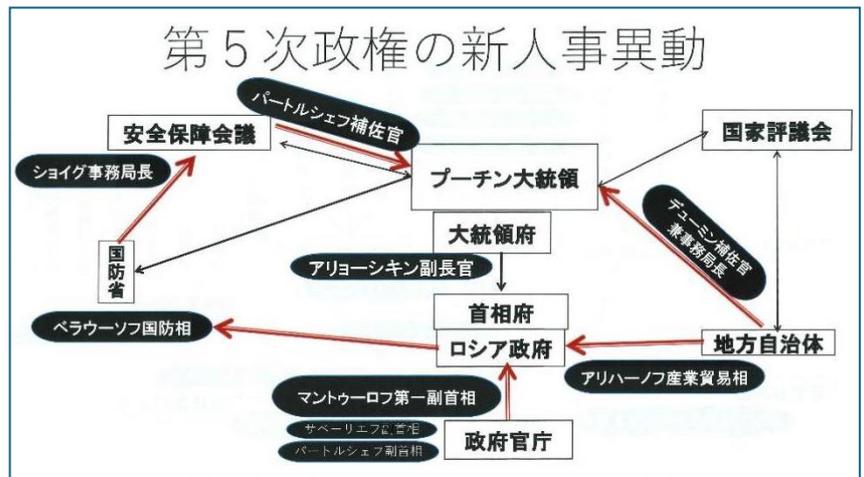
話が脱線しましたが、ショイグの国防相解任はプリゴジンの反乱騒ぎとの喧嘩両成敗だったのではないかとされています。兵器と弾薬をワグネルにちゃんと渡していればこんな騒ぎにはならなかっただろうというわけです。現在、ロシアでは検察庁が、軍内部の汚職摘発を進めており、かつてのショイグの部下たちが次々と逮捕されていることも、関係があるかもしれません。もっとも、ペスコフ大統領報道官は「ショイグは国家安全保障会議事務局長に移り地位をあげた。左遷ではない」と説明しています。

ショイグが国防省を去った後、新国防相になったのはベラウソフ第一副首相でした。この人事もロシア社会を驚かせ

た。ベラウソフという人は、実は軍人でもなんでもなく、経済の専門家です。軍事経験がないまったく素人のエコノミストの国防相就任に、戦争は続けられるかという疑問の声が出ました。

ベラウソフの父親はソ連時代の有名なエコノミストで、スターリン死後の雪解け時代に、社会主義経済からの脱皮をめざす経済改革(コスイギン改革)を試みたことで知られる有名な人物でした。息子のベラウソフも父親と同じ道を歩み、モスクワ大学経済学部に入學、エコノミストになりました。彼は若い時期に「物理・数学学校」に学び、大学では経済サイバネティクス専門家をめし、マルクス主義経済学ではない数理経済学を専門としました。今回の戦争でも、ITやデジタル新技術に関心を持ち、無人飛行機(ドローン)の存在に目を向け、「技術主権」の名のもとに、ドローンなどの技術開発・生産を支援しました。軍事支出の効率化、軍経済の国家経済への統合なども主張しています。

ベラウソフの登場に世界はあつげにとられました。特に米国とウクライナの関係者は、「最も強い、われわれにとってまずい人物が現れた」とコメントしたぐらいです。陸軍重視のロシア軍にとっても、今後大きな軍事・経済改革が訪れると、戦々恐々の騒ぎとなったとされます。現在、ロシア軍内部では、賄賂・横領など軍内部高官の汚職捜査が進んでいます。一方、ベラウソフは「完璧に腐敗から遠い役人」と言われており、プーチンの評価は非常に高いとされています。



## II. 第5次プーチン政権の人事異動

さて、第5次プーチン政権の人事異動の主な内容を見てみましょう(上図参照)。

### バトルシェフ安全保障会議事務局長の異動

まず、ショイグが国防相から安全保障会議事務局長に移った。ショイグの後には、ベラウソフ第一副首相がロシア首相府から異動して新国防相になった。安全保障会議の事務局長だったバトルシェフは、プーチンの親友であり、非常に力を持っていた治安・情報関係の第一人者です。彼を事務局長から外して大統領補佐官に就けた。バトルシェフの新しい役割は造船問題担当の補佐官です。地位が上がったとは言いがたい人事異動で、彼は安保会議の要職を取り上げられて、治安関係から外された形です。その代わりかどうかは知りま

せんが、息子のドミートリー・パートルシェフ農業相が副首相に昇進しました。「もう俺たちの時代ではない。若い者たちに席を譲るべきだ」とプーチンがパートルシェフの肩を叩いたのかもしれませんが。補佐官という大統領のすぐ近くにパートルシェフ(父)を移し、実際は、騒ぎを起こさないように取り込んだのではないかと私は思います。

### 軍・治安優先から社会・経済優先への移行か

パートルシェフの異動は、本人だけではなく、ソ連時代から大きな権力を振るってきた治安・情報機関を抑え込み、改革を行うというシグナルだったかもしれない。これは私の個人的意見ですが、プーチン時代が終焉へと向かうと、様々な組織が騒ぎを起こす可能性があります。治安・情報関係組織の上層部で権力を振っていたパートルシェフを大統領府に移し、いわば権力指揮下に置き、権力闘争で動かないように監視するという考えがあったかもしれません。さもなければ造船担当の大統領補佐官という意味がわからない。しかし、パートルシェフが静かに引退の道を歩むかどうかは不明で、今後どうなるかはまだわかりません。

その一方で、プーチンは、軍・治安関係機関の国家問題決定機関である「安全保障会議」に代わって、地方行政組織代表を取り込んだ、社会・経済問題を協議する「国家評議会」の地位を引き上げる措置を取っています。「国家評議会」を重要国家問題評議組織の中心へと移そうとする目論見が見え隠れします。軍・治安優先から社会・経済優先への移行であり、軍・治安組織の反発が爆発しないように、ロシア国家全体の組織を動かし始めたとも言えるかもしれません。あるいは、ポスト・プーチン時代の未来構図を描き始めたとも言えるかもしれません。もっとも、そんなに簡単に物事が進むとは限りません。

### 次期大統領有力候補、デューミン国家評議会事務局長

そこでもう1人の人物に焦点が当たります。デューミン・トゥーラ州知事です。この人が今回の人事異動で大統領補佐官に就任し、しかも国家評議会の事務局長になった。州知事の前は国防省・ロシア軍にいた人ですが、プーチンの命を受けて国家評議会事務局長に就任し、ロシア全土の地方自治体組織を集めて社会・経済問題を立て直すための強大な組織に変えていく任務を受け取った形です。

実は、デューミンは、電波・電子工学軍事高級学校を卒業後、ロシア連邦警護庁に入り、プーチン大統領の警護官を務めた人物です。そこでプーチンに認められ、軍参謀本部に移りました。デューミンは2014年3月のクリミア半島のロシア編入作戦を指揮したと言われています。その後、陸軍参謀本部長、国防次官を経て、トゥーラ州知事に移りました。

つまり、デューミンは、治安・情報機関、軍参謀本部、地方自治体と様々な職務を移り渡し、プーチンはその状況を見ていた可能性が強い。ロシア社会ではデューミンは次期大統領最有力候補とも言われています。大統領補佐官として軍・治安関係を見ながら、これから国家評議会をどのように育て、力を結集するのかで、デューミンおよびロシアの将来の道が決まると言っていけないかもしれません。

### 軍需産業の第一人者、マントゥーロフ第一副首相

一方、ベラウソフが新国防相へ異動した後に、その後任の第一副首相の席に座ったのはマントゥーロフ産業貿易相です。彼はモスクワ大学社会学部を卒業し、ヘリコプター製造会社に就職、国防産業の世界で力をつけ、連邦軍事産業委員会幹部会議長になった。ロシア政府内部の軍需産業の最大責任者です。その軍需産業の第一人者がロシア政府の第一副首相になった。

マントゥーロフは、国防軍需産業複合体「ロステフ」の会長で、ロシア軍需産業界を牛耳るチェーメゾフと近い関係にあります。チェーメゾフは、ソ連時代にKGBの職員として東独に赴任しており、プーチンと同じアパートに住んでいたとされます。

マントゥーロフ第一副首相は、ウクライナ戦争を背景に、兵器および軍需製品の増産という大任務を請け負ったことになる。彼は、国防省に移ったベラウソフとともに、ウクライナ戦争状況の情報交換をしながら、軍需産業および近代兵器の開発・発展を進めることとなります。とはいえ、100万人以上の人々が働き、官僚主義と汚職・横領などがはびこっている保守的ロシア軍の組織改革を進めることができるのか、ウクライナ戦争の行方にも関わる大きな問題ですが、必ずしも前途が明るいとは言えない状況です。

### もう一人の若手候補、アリハーノフ産業貿易相

このベラウソフ国防相、マントゥーロフ第一副首相、チェーメゾフ「ロステフ」会長の3人の軍事・軍需産業ブロックに、もう1人若い次期大統領候補がやってきました。マントゥーロフは産業貿易相から第一副首相に昇任したわけですが、その空席を埋めて産業貿易相に就いたのがアリハーノフ前カーリーニングラード州知事です。彼は、わずか38歳でありながら、カーリーニングラードで大活躍し、知事選挙ではプーチンを追いかける81.06パーセントの驚異的な得票率を獲得しました。下院の産業貿易相の承認討議でも、賛成430反対0という圧倒的な支持を獲得しました。この人物も次期大統領候補と言われています。プーチンは、軍需産業という重要部門で、アリハーノフに経験をさせて、どのように伸びるか、見守っている可能性が強いと思います。

以上を踏まえたうえで、現在の第5次プーチン政権の人脈図を次頁に載せておきます。

## Ⅲ. 「プーチン体制の終焉」

では、プーチンは今、何を考えているのでしょうか。

### エリツィンはなぜプーチンを次期大統領に選んだのか

プーチンは、エリツィン大統領から次期大統領の継承を通告され、ロシア国家の指導者の道歩きました。プーチンは今、その昔の出来事を一生懸命考えている可能性が強いと思います。自分が経験した大統領の座の引き継ぎの際に何が起きたのか。プラス、マイナスを考え、今度は自分が後継者通告をする立場になるが、どうすればいいのかと考えていると思われます。

エリツィンはなぜプーチンを選んだのか、不明な部分が多

い。プーチンは、当時、KGB出身の若い官僚で、無名な人物だった。突然、首相に任命された時、世界は「プーチンとは誰か？」という反応でした。エリツィンは、ソ連・社会主義を否定し、リベラル民主主義の流れを目指していた。建築労働者出身であり、政治・経済の専門家やさらには治安・情報関係者ではなかった。細かく論理的に話を進めるといよりは、面倒になるとダイナマイトで全てを爆破し、ゼロにするような人物でした。

一方、プーチンは、レニングラード大学法学部卒業の英才で、母国のために諜報活動をするのを夢見てKGB組織に入った。必ずしも、エリツィンと同じ考え方、生き方をした人物ではなかった。にも関わらず、なぜプーチンが選ばれたのか。それは正しかったのかという疑問にもなります。

エリツィンがプーチンに行ったことが正しかったと考えるならば、プーチンはいずれ訪れるであろう自分の引退・後継者への引き継ぎに、利用するかもしれないと私は思います。

考えられるプーチンの選択は、以下のようなものであるかもしれません。

- ① 若い人を選ぶ。
- ② よく知られている有名な人物に限る必要はない。
- ③ 自分と同じような性格の人物である必要もない。
- ④ 思想・考え方が同じである必要もない。
- ⑤ 自分と同じ職業に従事した人物を選ぶ必要もない。
- ⑥ 国家建築という壮大な構想に耐えられるかどうかだ。

上記のことを考えると、プーチンは、後継者は治安・情報機関やシラビキのようなプーチンがよく知っている世界から選ぶ必要はないと考えているかもしれない。経済専門家や理科系技術者でもいいと考えているのではないか。ある意味、一つの部門に集中する人物よりも、他の部門でも働くことができ、柔軟な態度で何でも理解ができる人物の方が国家運営はうまくいくと、いまさらながら考えているのではないかと思われます。

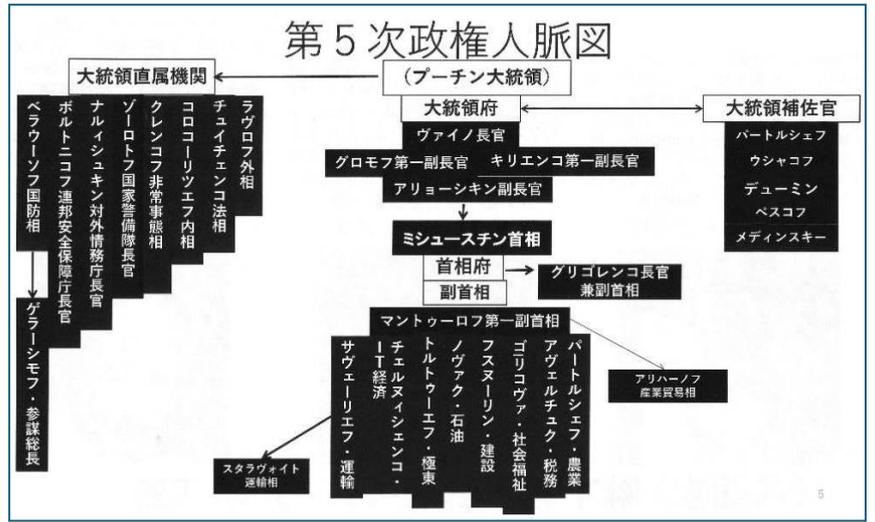
### プーチンが語ったロシア国家の指導者像

実は、プーチン大統領は2024年の2月、未来のロシア国家の指導者はどのような人物であるべきかを語っております。

- ① 頼りになる。
- ② 信頼できる。
- ③ ロシア国家へのしっかりとした忠誠がある。
- ④ 国家主義者（正確には、脆弱ではない国家性・国家力がロシアに必要だと考えている人物）。
- ⑤ 国家主義の固守。
- ⑥ キリスト教およびスラブ的価値観の信奉者。

このように言っていました。

④の国家主義者というのは、ちょっと説明が必要です。ロシア語でガスダールストヴェンニクと言うのですが、日本語にはない概念で、英語でも該当するものがない。国家主義者というと、欧米では強大な力を持つ対外的侵略的な国家の信奉者を想定するのですが、ロシアでは内部の方が問題であって、プーチンは脆弱でない国家を作ることが国家主義だと言っています。



### いつまで大統領を続けるのか

最大の問題は、いつ大統領の座を降りるのかということかもしれません。プーチンは、現在72歳。任期6年で78歳まで大統領の地位が許されている。さらに大統領の座を求めるとなれば、もう一度選挙に勝って、84歳まで大統領の地位を継続することができる。しかし、現在80歳のバイデン大統領は、高齢不安による言動・行動から大統領選挙からの撤退を宣言せざるを得ませんでした。プーチンも高齢化現象が迫ってくる可能性がないとは言えません。あと12年間大統領を務めるのは無理との声が強いです。仮にもう一期大統領職に挑戦しても、次の78歳以降(第6次プーチン政権)は、プーチン時代は終わるといふ雰囲気はどんどん強まっています。つまりロシア社会全体が不安定になっていく可能性が高い。

「もう間もなく大統領は去っていく」という現実が近づくと、プーチンの支持率は急激に低下していく可能性がある。そして利害が絡んだ権力闘争が始まるかもしれない。出来れば、プーチンは78歳で次の後継者を選び、後継者の背後で見守り、支援するという立場をとる方が正しいかもしれない。その方が、国内不満や反乱騒ぎを止め、ロシア国家を崩さない、守るというプーチンの思想・考え方にかなっていると思います。

### スムーズな権力移行はできるのか

プーチンは、以前から「大統領の座を降りる、もしくは降りたい」と示唆したり、愚痴を話していました。しかし、2003年のイラク戦争以降、米露関係の対立が激しくなり、結局ウクライナ戦争へと進んでしまいました。世界秩序・世界戦略のぶつかり合いは、簡単には終わらない状況にあります。

この国際状況を背景に、ウクライナ戦争が進行中で、いつ終わるかははっきりしない。プーチンは、78歳までに権力から降りて、若い指導者に権力を譲るのが、安定した政権移譲になると考えているのではないかと、私は思います。

戦争を抱えてスムーズな権力移行ができるのか、大きな疑問もありますが、78歳以降も権力を維持するとなると、どこかで大統領の悲劇が始まる。多分、プーチンはそのことを理解しており、第5次政権の人事異動では、その問題が影を投げかけていたと私は思います。若い指導者を政権構造に入れるという目論見が明らかに進められています。しかし、これ

が上手くいくかどうか、背景には単なるロシア国内の権力・利害闘争だけではなく、世界秩序の変換という大きな動きが進んでいる。プーチンもしくはロシアがうまく対処できるのか、疑問が多いのが実態と言えるかもしれません。

ということで、今回の人事異動を見ると、どう見てもこれはポスト・プーチンの新しい時代を作るために、その準備が動き出したのではないかと、私は感じております。

#### IV. 第5次プーチン政権の主要人物

##### (軍関係) アレクセイ・デューミン (大統領補佐官)



1972年8月28日、クールスク州生まれ。電波・電子工学軍事高級学校卒業後、ロシア連邦警護庁を経て、大統領安全法保障庁でプーチン大統領警護。2014年軍事参謀本部情報局次長、クリミア編入作戦を指揮。陸軍参謀本部長、国防次官、トゥーラ州知事などを歴任。現在、大統領補佐官、国家評議会事務局次長。次期大統領有力候補で、現在、次期大統領に最も近いと目されている。

##### セルゲイ・ショイグ (安全保障会議事務局長)



1955年5月21日トゥヴァ自治共和国生まれ。父親は少数民族トゥヴァ人、母親はウクライナ系ロシア人とされる。クラスノヤルスク市工業大学入学、建築を学ぶ。シベリア各地で建築技師を歴任。非常事態相、モスクワ州知事を経て、国防相に就任。将来の大統領候補と言われたことも

あった。彼の夢は、本当は国防・治安関係ではなくて、シベリアに立派な建築都市を作るのが夢だと言っている。

##### ニコライ・パートルシェフ (大統領補佐官)



1951年7月11日、レニングラード生まれ。造船大学卒業、国家保安委員会(KGB)高級学校、KGB防諜局を経て、プーチン大統領の後を追うように、大統領府、連邦保安庁、安全保障会議事務局長に就任。プーチン大統領の側近で、有力な後継者とも言われた。新政権では、安保会議から大統領補佐官(造船担当)に異動した。

##### (軍需関連)

##### セルゲイ・チェーメゾフ (国営軍需複合体「ロステフ」会長)



1952年8月20日イルクーツク州生まれ。同州国民経済大学卒業。貴金属・非鉄金属の技術者。KGB関連組織に勤務、東ドイツに赴任し、プーチンと同じマンションに住んだ。

大統領府対外経済局長、ロシア国防輸出企業会長、ロシア軍需産業を牛耳る有力者。軍事アカデミー・メンバー。

##### デニス・マントウーロフ (第一副首相)



1969年2月23日、ムルマンスク生まれ。94年モスクワ大学社会学部卒業。露印合弁航空運輸会社に勤務。ウラン・ウデ航空会社、ヘリコプター製造会社を経て、国防産業統一産業連盟代表、産業・エネルギー次官、産業貿易相、副首相兼ロシア連邦軍事産業委員会幹部会議長。軍需産業の政府側トップ。

##### アントン・アリハーノフ (産業貿易相)



1986年9月17日、アブハジア生まれ。多数の民族の血を引く。92年のグルジア・アブハジア戦争でモスクワへ逃避。財政、法律を学び、法務、産業貿易省勤務。キャリアニングラードへ移り、30歳で最年少知事。下院全員一致で産業貿易相を承認。将来の大統領候補の一人。

##### (経済刷新) アンドレイ・ベラウーソフ (国防相)



1959年3月17日、モスクワ生まれ。物理・数学学校卒業。モスクワ大学経済学部入学。経済サイバネティックス専門家。社会公平・計画経済を推進。「完璧に腐敗から遠い役人」と呼ばれている。プーチン大統領が最も信用した経済アドバイザーで、父親はソ連時代のコスイギン経済改革に関与した。

##### マキシム・アリョーシキン (大統領府副長官)



1982年7月21日、モスクワ生まれ。モスクワ高等経済学院大学院を卒業。第一級エコノミスト。ロシア中央銀行チーフエコノミスト。ロスバンク役員、財務省長期戦略計画局長、財務次官、経済開発相、日露貿易・経済協力問題大統領特別代表、大統領補佐官を歴任。ロシア経済の未来を導く人物と言われていて、この人も次期大統領候補である。

##### ヴィタリー・サヴェーリエフ (副首相/運輸担当)



1954年1月18日、タシケント生まれ。レニングラード機械・力学工学大学卒。技術エンジニアの様々な仕事をした後、経済発展・貿易省次官、航空会社「アエロフロート」会長職に就任し、世界有数の会社へと指揮。その後、運輸相に就任。今回、運輸問題全体を担う副首相へ昇格し

た。

## (政府行政)

## ミハイル・ミシュースティン (ロシア政府首相)



1966年3月3日、モスクワ州生まれ。ユダヤ系ロシア人。モスクワ工作機械・機器大学でシステム自動設計を学び、西洋の情報工学導入を指揮。連邦税務局へ移り大きな業績を残し、税務庁長官へ。真面目かつ綿密に仕事こなし、プーチンの評価は高い。メドベージェフの後任首相。

## ドミートリー・グリゴレンコ (副首相・首相府長官)



1978年7月14日、チュメニ州生まれ。国立クバン大学卒業。クラスノダール州の税務組織に入り、税務庁副長官まで上り詰めた。情報工学にも関心を持ち、当時の上司ミシュースティン長官の目に留まり、副首相、首相府長官に。現在、首相を支える有力人物。

## アントン・シルアーノフ (財務相)



1963年4月12日、モスクワ生まれ。モスクワ財政大学卒業。漁業企業計画研究所エコノミスト。財政専門家。財務次官、財務相、第一副首相などを歴任。年金年齢の引き上げを主張し、大きな批判を浴びた。大学、銀行等にも勤務。論文「市場経済の移行条件における国家予算政策」。

## (エネルギー経済)

## イーゴリ・セーチン (石油企業「ロスネフチ」会長)



1960年9月7日、レニングラード生まれ。レニングラード大学文学部卒、内戦のアンゴラで軍の通訳(ポルトガル語)。ソ連崩壊後、サンクトペテルブルグ市役所に移り、プーチンの個人的秘書。以後、プーチンとともに動き、大統領府副長官に。治安関係組織と密接な関係を築き、石油会社ロスネフチを世界的企業にのし上げた。

## アレクサンドル・ノヴァク (副首相)



1971年8月23日、ドネツク州生まれ。北極圏のノリリスクへ移住し、工業研究所で経済学・経営学の学位取得。ノリリスク鉱業会社に入り、クラスノヤルスク州副知事、連邦財務次官、エネルギー相、さらにエネルギー関連会社の取締役を歴任。エネルギー全般の総責任者。ロシア経済の動向を握る。

## アレクセイ・ミーレル (ガス企業「ガспロム」会長)



1962年1月31日、レニングラード生まれ。ドイツ系ロシア人。レニングラード財政・経済大学卒。チュバイスを中心とした若い改革派経済学者グループに帰属。プーチンが議長だった市役所対外関係委員。巨大ガス企業に移り、世界的な影響力を持つトップ経営者に。

## (大統領を支える人たち)

## セルゲイ・ソビャーニン (モスクワ市長)



1958年6月21日、ハンティ・マンシースキー民族管区生まれ。祖父はロシア正教古儀式派の信徒。コストロマ工科大学を卒業。チェリャビンスクの庄延工場で働き、コガリム市長、上院議員を経て、チュメニ州知事、第一副首相、大統領府長官を歴任。モスクワ市民の支持率は非常に高い。

## セルゲイ・キリエニコ (大統領府第一副長官)



1962年7月26日、スプーミ生まれ。ゴリキー水上交通大学卒業後、共産党青年組織の指導者に。ネムツォフ州知事に引き抜かれ、燃料エネルギー省第一次官、同相、首相。ロシア通貨危機で解任。その後、原子力庁長官、ロシア原子力社長。プーチンの信頼は意外に強いとされる。原子力関係のトップ。

## アントン・ヴァイノ (大統領府長官)



1972年2月17日、エストニア生まれ。曾祖父はロシア革命に参加、祖父はエストニア共産党第一書記。本人はモスクワ国際関係大学を卒業後、在日ロシア大使館勤務。外務省第二アジア局、大統領府議典局勤務を経て、首相府長官、大統領府長官。「質の高い役人、陰謀家ではない」と言われる。

## (豪商・オリガルヒ)

## ゲンナージー・ティムチェンコ (起業家・オリガルヒ)

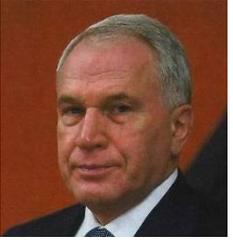


1952年11月9日、アルメニア共和国生まれ。レニングラード軍事機械大学卒。対外貿易省技術者。KGB支配のフィンランド会社に入り、石油関連の仕事をして経営者に。フィンランド国籍を取得(ロシアと二重国籍)。プーチンの親しい友人で、「ロシアの隠された億万長者の1人」とされる。

**アルカージー・ロッテンベルク (起業家・オリガルヒ)**

1951 年 12 月 15 日、レニングラード生まれ。ユダヤ系の家系。レニングラード体育大学卒。プーチンと柔道クラブを打ち上げた。ソ連崩壊後、物々交換で利益を増大させ、ガスプロムとの関係を広げ、ガスパイプライン建設に関与し、億万長者になった。

疑惑の「プーチン宮殿」(※)の“持ち主”とされる。

**ユーリー・コヴァリチュク (起業家・オリガルヒ)**

1951 年 7 月 25 日、レニングラード生まれ。母親はユダヤ人。レニングラード大学物理学部卒。「ロシア銀行」会長。金融・不動産・メディア分野に巨大資産。プーチンに最も近い人物で、クリミア併合を説得したとされている。反リベラル・反西欧・陰謀論。息子は会計検査院長官。

計検査院長官。

※ プーチンの宮殿 数年前に反対派のナワリヌイ・グループが、クリミアに近いカフカス地方に作られた広大な宮殿を暴露した。宮殿を空撮した YouTube 動画はロシアで物凄い反響があり、何千万という人がこれを視聴した。オリガルヒの 3 人は、プーチン宮殿に膨大なお金を使ったと言われている。

※この図を作っていて思ったのは、いかにプーチンと近い人物が多いかということと、もう一つは、この人たちは、出世の階段をストレートに上がってきたのではなくて、アンゴラで通訳をしていたとか、漁業をやっていたとか、下から這い上がってきた人たちがプーチンと関係を結んで、権力体制に加わってきているという感じがする。また、経済関係には意外と理科系の専門家が多い。(了)

## \*\*JICのロシア語留学・研修\*\*

35 年間の実績だから、JIC のロシア語留学

JIC ロシア語留学研修は、JIC 国際親善交流センターが日本で最初に日ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この 35 年間で JIC がロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて 4,500 名以上にのびます。

安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学中の皆様をバックアップするために、JIC では各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

## ロシア語長期留学 9 月生・募集中



オンライン  
相談 受付中!

期間：2025年4月1日より10ヶ月

締切：2025年1月15日

モスク国立大学 984,000 円(授業料 10ヶ月) << 予価 >>

サンクトペテルブルク国立大学 1,039,000 円(授業料 10ヶ月)

ゲルツェン教育大学 908,000 円(授業料 10ヶ月)

ウラジオストク極東連邦大学 430,000 円(授業料 10ヶ月)

シンスク国立言語大学 422,000 円(授業料 10ヶ月)

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金  
および取得手数料などががかかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です!  
(中央アジア、バルト諸国など)

◆JIC ロシア留学デスク◆

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日 9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要 事前予約)

## ◆◆編集後記◆◆

▼ウクライナ戦争が始まって 2 年半。日ロ交流活動は極めてやりにくい状況が続いています。しかし、私たちは立ち止まっているわけではありません。本誌「日ロ交流情報」欄で毎号報告しているように、各地で、今できる活動が積み重ねられています。▼今秋も、ロシア語映画発掘上映会、日本ロシア音楽家協会創立 40 周年記念コンサート、ロシア文化フェスティバル IN JAPAN、日ロ協会などの講演会…と多くのイベントが予定されています。▼JIC も負けずに、旅行・留学分野での日ロ交流拡大に邁進します。読者の皆さんからの返信、声かけが大きな力です。応援よろしくお願いたします。(F)